

広島市安佐地区におけるバレーボール運動の発展 とその教育的影響に関する総合的研究 (1)

——開始期より昭和20年までの運動の展開と、関連する
教育的および社会的要因の分析を中心に——

佐々木 宏*・岸本幸次郎**・宇野 豪**・荒井 貞光***

(受付 1997年10月13日)

I. 研究の目的と方法

広島市の古市地区を中心として、本研究でとりあげようとしている旧安佐地区バレーボール運動が始ったのは昭和の初期からであり、その運動は今日まで70年近くにわたって継続されているだけでなく、戦後期の昭和23、24年には、地区の青年達が組織した嚶鳴クラブが大学のチームを破って全国制覇を果たし、全国の関係者を驚かせており、また、そこから全日本チームの選手達を生み出している。しかし、この運動はこのような選手の養成をめざして始められたものではなく、もともと地域の小学校の放課後指導への取り組みから始った教育活動であり、その熱心な取り組みが学校教育だけでなく、地域生活のひろがりのなかでさまざまな成果を生み出してきたのである。この運動は主として地域の小学校のバレーボール活動として展開してきたものであるが、地域の人々が参加するバレーボール活動も生れ、地域全体でこれを地域の伝統的スポーツ活動として、さらには伝統的な生活文化としてまで地域の人々に意識され、親しまれている活動になっており、全国的にみても極めて注目される地域のスポーツ活動であるといえる。

この地域は昭和48年に広島市に合併するまでは旧安佐郡に属し、旧広島市をとりまく近郊農村地域であり、この運動の発祥の地である「嚶鳴小学

* 広島修道大学教授 ** 元広島修道大学教授 *** 広島市立大学教授

校」の位置する古市地区は、太田川のほかに安川と古川の3つの川が流れるところから、明治22年から昭和18年まで長い間「三川村」と呼ばれていた¹⁾。同地区は農業の仕事として畑作の占める率が高く、稲作を中心とする農村とは性格を異にしていた。それは広島菜などの野菜の栽培のほか、養蚕もかなり多かったようであるが、それ以上に「古市といえば麻」といわれるほど麻(苧麻)の栽培が古くから行われていただけでなく、この地区には県北の地方からも刈り取られた麻が送られてきて、ここで繊維をとる作業が集中的に行われたり、さらに製品の「せり市」による取引や出荷などがあって、関連する仕事が農家の副業として大きなウエイトを占め、このことはある程度農家の収入を豊にするのに役立っていたが、当然、それに要する労働の負担も多かった。

それは、畑作としての麻の栽培が、後作として大根と、さらに広島菜を作る三毛作として行われるために忙しいだけでなく、麻の繊維の生産や取引が地区のなかで歴史的にもかなり組織化されて行われてきていたので、時間に追われた作業が続いたり、具体的な作業として川で繊維をとったり洗滌したりする扱苧(こぎそ)の作業や、一部は製糸して出荷するために繊維を細くして糸車にかけるといった作業に、農家の主婦達は若い間は前者の仕事に、年をとると後者の仕事に従事するといった生活形式ができあがっていたのである。このような地域の産業とそれに伴う生活形式は、この地区に3本の川が流れている地理的条件から歴史的に形成されてきたものであり、戦後に麻葉取締法によって麻の栽培が制限されたり禁止されるまで続いていたのであった²⁾。

このような旧広島市の近郊農村地区の小学校に、バレーボールがどのようにして導入され、それが今日までどのようにして受継がれ、地域の伝統文化としてまで人々に親しまれるようになったのであろうか。この地区にバレーボール運動が開始される時点では、日本では、また、広島市ではバ

1) 安古市役場「安古市町誌」昭和45年12月 P 853-P 855

2) 同書 P 521-532

レーボールがどの程度行われていたのでしょうか。もし、広島市でかなり盛んであったとすれば、それが次に郡部に普及していくのは時の流れとしても理解できるであろう。しかし、もしそのような時間的な経過が郡部への普及をつくり出したとしても、なぜ、この地区に今日まで続くバレーボール運動が育ち、時折、人々の耳目を驚かすような成果を生み出してきたのでしょうか。これは、急激な社会変化のなかで、地域の教育力の回復とか、学校教育と社会教育の連携とか、あるいは生涯体育ないしは生涯スポーツの必要性などが力説されている今日、大いに研究に値する問題である。

本研究を進めるにあたって、われわれはこの運動を理解する上で必要と考えられる地域の教育やスポーツなどの関係資料の収集に努力するとともに、この地区のバレーボール運動に直接に、あるいは間接に関わった人々を訪ね、その人の体験や、さまざまな時期の状況や、関連する情報をひろく収集することに努めた。それは、今の時期であれば、初期の事情に通じている人がまだ近辺に居られ、話を聞くことが可能であるが、時期を逸すれば、貴重な知識や情報が失われてしまうことにもなりかねないからである。その結果、われわれは本論の中にしばしば引用するように、多くの貴重な情報や資料を得ることができた。このことを喜びとするとともに、ご協力いただいた方々に心より感謝したい。

この論では、これらの方法によって得た多くの情報や資料を整理して、できるだけ正確に運動の開始に至る経緯とその後の展開の経過や成果を把握するとともに、その随所に含まれる、運動の教育的、並びに社会的要因を分析することを目的にしている。この運動は長い期間のなかでさまざまな変化を示しているので、この報告では運動の開始より昭和20年までの展開について考察する。

Ⅱ. 安佐地区バレーボール運動の開始までの広島における普及の状況

安佐地区のバレーボール運動は、昭和4年に当時の三川村の古市に、明治以来、同地区の小学校として設立されていた「嚶鳴（おうめい）小学校」

で、同校教員の頼実力氏がバレーボールの指導を始めたことが、その出発点になっているが、彼がその時にどの程度このような運動を意識していたかどうかは分からない。恐らく彼は新しいスポーツに関心をもったであろうが、その後これ程の運動に発展していくことは予想していなかったであろう。しかし、彼が始めてから数年のうちに、早くも安佐郡の小学校の大会が開催されるようになり、それが今日まで続いて、今ではバレーボールが地域の伝統的なスポーツとなり、この大会は地域の小学校の伝統行事になっているのである。

頼実力氏はこの運動の生みの親であり、育ての親であり、その熱心な性格や指導力や人柄が、この運動をもりたて、その輪をひろげて今日あらしめたといわれている。従って、本研究ではこのような運動を力強く、かつ、人の輪を育てて地域の連帯や多くの教育的成果をもたらしつつ、長年にわたり推進してきた頼実力氏について、その人物や指導の実態について考察することは重要な課題になるであろう。しかし、それとともに、この運動がどのような時代的、あるいは社会的背景のなかで、そこに含まれる諸問題と関わりながら展開してきたのかを考察することも忘れてはならない。

頼実力氏は、大正13年に広島の広陵中学を卒業した後、すぐに代用教員として安佐郡亀山村の虹山小学校に赴任し、大正15年10月に嚶鳴小学校に転任し、昭和4年に正教員の資格を得て、同校の「訓導」となった。したがって、彼は正規の教員となるまでに5年間を代用教員として勤務してきたわけであるが、走ることが早く、スポーツ好きで、運動場を走る姿は颯爽としており、明るく大きな声で子供たちに話しかけ、思いやりがあつて、かつ、てきぱきとした子供のよき教育者、スポーツのよき指導者としての天性を備えていたようである³⁾。

彼は昭和4年に嚶鳴小学校でバレーボールを指導し、翌年6月に行われた第1回の「県下小学校男子排球大会」に同校と緑井小学校が安佐郡より出場している。前年(昭和4年)には「県下小学校女子排球大会」が開か

3) ひろしまバレーボール調査研究会「沖道夫氏インタビュー調査資料」1995

れていたのであるが、これには同校は参加していない。嚶鳴小学校ではこのように昭和4年にバレーボールを始めているのであるが、頼実氏は同年の女子の大会を知って、翌年の男子の大会への参加を考えて、個人的に子供たちに指導を試みたのではないかと思われる。というのは、後に述べるように、嚶鳴小学校が全校的な取り組みとしてバレーボールを始めるのは、昭和5年からであると考えられるからである⁴⁾。

その頃まで、安佐郡の小学校ではドッジボールが盛んであった。嚶鳴小学校は安佐郡南部の数校との間で対抗試合を行ったり、郡の大会へと規模が拡大すると、頼実力氏に率いられた嚶鳴小学校のチームは他を圧倒し、制覇を続けていたという。それが昭和4年から数年の間に安佐郡の小学校はドッジボールからバレーボールへと移行していくのである。

安佐郡のバレーボールの始まりについて、「安佐のバレーボール」と題する昭和56年2月23日の中国新聞の特集記事には、次のように書かれている⁵⁾。「昭和4年頃に安佐郡の小学校にバレーボールが取り入れられたが、広島市の旧制中学校や女学校はもちろん、県下小学校排球大会さえ、すでに開催されていた。なぜか、安佐地方は出遅れていた。」この文面では、広島ではかなり早くからバレーボールが盛んであったのだから、安佐郡にはもっと早く導入されていてもよかったのではないか、といているようである。その記事の少し先の方では、「安佐一帯は、太田川と可部街道沿いに開けた農村で、商業はもちろん、文化的にも広島市との結びつきは昔から強かった。しかし、バレーボールに関しては、大正から昭和初期まで、それほどの影響は読み取れない。」と書いており、さきの言葉をもう一度繰り返しているようである。

そこでわれわれは、安佐郡の小学校でバレーボールを始めた時までに、どの程度に、広島や日本でバレーボールが普及し、展開していた状態があったのかということ把握しておこうと思う。というのは、すでに述べたよ

4) ひろしまバレーボール調査研究会「有馬静男氏インタビュー調査資料」1996

5) 中国新聞特集「安佐のバレーボール」昭和56年2月23日 P7

うに、安佐郡のバレーボール運動は今日まで70年に近い年月を経ており、それだけに当時の運動の実態や性格や意義をできるだけ正確に捉えようとするれば、当時の社会の状況について理解しておかなければならないからである。

さらに、バレーボールそのものも、今日まで約百年の歴史を経ているのであるが、その間にさまざまな変化をしており、時期によってどのような形態をとっていたのかも異っているのです。この点についても若干の考慮をしておく必要があるように思う。とくに安佐郡のバレーボール運動の端緒となった嚶鳴小学校へのバレーボールの導入にあたって、頼実氏は、何故、当時盛んであり、かつ、当時安佐郡の大会でも嚶鳴小学校が制覇していたドッジボールをやめて、バレーボールへと移行したのであるか、といった問題などを考えてみると、そこには「バレーボールには皆が参加できるから」^{6,7)}ということが、理由の1つとして大きな意味をもっていたことが分かった。

ドッジボールとバレーボールを比較するとき、われわれはとかくドッジボールなら、ただボールを投げたり、捕ったり、当らないようによけたり、逃げたりするだけだから、だれでもできるし、単純で、とくに小学生には適しているが、バレーボールにはある程度基礎的な練習をしていないとできないから、だれでもできるとはいえない、と思いがちである。しかし、ある時に嚶鳴小学校ではこのような問題が切実な問題として起こり、その真剣な解決策として頼実氏はバレーボールを皆が大勢でできるスポーツとして選び、率先してその指導にあたり、他の教師たちもその姿をみて全校的な取り組みが始まったという事実を見ると、われわれはバレーボールがどのような性格や形態をもったスポーツとして考案され、また、時代とともにその形態を変化させてきたのかといった問題が、安佐郡のバレーボール運動を研究する上にも、大きな関わりをもつと考えるのである。

6) ひろしまバレーボール調査研究会「葭谷實氏インタビュー調査資料」1996

7) 同「頼実力氏 手記」昭和46年

まずはじめに、安佐郡のバレーボール運動が始まる以前に、広島にはどの程度にバレーボールが普及し、展開していたのかについて考察してみよう。広島バレーボールは、東京高等師範学校を卒業して明治42年に広島師範学校（以下、「県師」と略記）に武道の教師として着任した河津彦四郎氏が、スポーツ万能の選手でもあり、大正6年（1917）東京で開催された第3回極東選手権大会に砲丸投げの競技に出場した際に、バレーボールの試合を見学して興味をもち、県師で教えたことが、その始まりである⁸⁾。

さらにその教え子である多田徳雄氏が、大正8年（1919）にマニラの第4回極東大会に陸上と水泳の選手として出場し、改めてバレーボールの試合を見て興味をもち、勤務校の中島小学校で学校を訪れる青年達に教えたり、中国新聞に「バレーボールについて」という記事を寄稿したり、広島高等師範学校で開催された講習会の講師となったりして普及と指導に努めた。その講習会に参加した教員によって教員団チームが生まれ、広島と呉の教員チームによる定期戦が行われている⁹⁾。その前年には広島市西錬兵場（現在の県庁附近）で朝日新聞社の主催による女学校陸上競技会で排球が競技種目として初めて行われたという記録があるが、具体的な内容は不明確なので、大正8年（1919）が広島でのバレーボールの競技が開始した年と言えるであろう。これは安佐郡のバレーボール運動が始まる昭和4年の僅か10年前のことであり、かつ、まだ全く始まったばかりの状態だったのである。

視野を少し広げて、日本におけるバレーボールの開始という視点からこの問題を眺めてみても、あまり大差がないことが分かる。日本のバレーボール史では、アメリカのYMCAの体育主事養成学校で学んだ大森兵蔵が明治41年（1908）に帰国し、東京神田のYMCAに勤務して、体育施設がなかったので屋外でバレーボールを教えたという¹⁰⁾。因みにわが国ではその後も長

8) 金柁晴海「広島スポーツ100年」中国新聞社 昭和54年9月 P44

9) 同書 P50-P66

10) 水谷豊「バレーボール——その紀元と発展——」平凡社 1995 P174

い間、バレーボールは屋外であるのが普通であった。

彼は、大正2年(1913)に死去したため、日本のYMCAは体育指導者をアメリカから招くことになり、同年に来日したのがF. H. Brownであった。彼はその後17年間日本に滞在してバレーボールの普及と向上に尽力したので、「日本のバレーボールの父」と呼ばれており^{11,12)}、彼の来日をもって日本におけるバレーボールの始まりとするのが定説のようである。確かにこれは一つの時期を画す上で分かりやすいが、実質的にはバレーボールが始まったといえる程の状態ではなかった。

公式の試合を行った最初の記録は、前述した大正6年(1917)の第3回極東選手権大会への出場である。この第1回大会は1913年にマニラで、第2回は1915年に上海で行われ、第3回は1917年に東京で開くことが予定されていた。この間F. H. Brownはやや施設が整っていた関西(京都、大阪、神戸)のYMCAや神戸高商で指導に力を入れていたといわれており、ある程度大会への準備ができたのではないと思われる。大会が近づいた時、日本体育協会は彼にチームの編成を依頼し、彼は関西YMCAチームともいえるメンバー16人を急ごしらえで編成し、(当時のバレーボールは16人制であった)試合に臨んだが、フィリピンや中国に対して全く歯が立たず、完敗であった。チームのメンバーは確かにYMCAで体育に親しんでいたが、バレーボールの選手でなく、他の種目の選手が兼ねていたのである¹³⁾。

そこで、われわれは日本のバレーボールの歴史も、大正8年(1919)の広島での記録から始まると考えても、さほど誤ってはいないことが分かるのである。大正10年(1921)には日本体育協会が全日本排球選手権大会を開催し、男子の数チームが参加しただけであったが、広島よりその前年に神戸高商に移っていた多田徳雄が監督になって、同校がその後も連続して

11) 水谷豊「バレーボール——その紀元と発展——」平凡社 1995 P188

12) (財)日本バレーボール協会「日本バレーボール協会50年史——バレーボールの普及と発展の歩み——」1982 P2-P3

13) 水谷豊「バレーボール——その紀元と発展——」平凡社 1995 P177

優勝し、これより同校は日本のバレーボールの指導的役割を果たすことになった¹⁴⁾。日本のバレーボールが形を整えて正式に開始したのは、この年からであるということもできよう。

因みに、「排球」という言葉はわが国で戦前にふつうに用いられた言葉であるが、これは前述の第3回極東大会のときに、中国の新聞記者がその語を使うのをみて、日本の新聞にも使い始めたという。これは「球を相手のコートの方へ打って出す」という意味で、新聞には簡潔な語句が便利で、また、必要でもあった。その時のチームは16人制であり、パスの回数を3回までに定めた。このパス3回制は、F. H. Brownが本国に通知してルールとするよう要請したが、アメリカでは議論となり、1922年になってアジアからの提案を受け入れたという。それまでパスの回数は無制限であった。チームの人数についてもアメリカでは規定がなく、「態度の悪い者は排除し、人数が6人以下になった場合には試合を中止する」といった規則であったが、1923年に公式試合は6人制とすることが定められた¹⁵⁾。これに対してわが国では、大正10年(1921)に12人制、同14年(1925)に9人制となり、その後長く9人制が続けられた。

このようなルールや形式の変化は、1925年(大正14)頃までは、わが国でもアメリカでもまだ、バレーボールの形成期であったことを示している。わが国では、昭和期に入ると各種の大会が開かれてさまざまなチームが活発な活動を示すようになり、バレーボールは展開期に入ったといつてよい。とすれば安佐郡の運動は展開時期の初期に始まっているので、小学校としては早い時期の極めて進取的な取り組みであったのである。

このことについて、もう少し昭和の初期のことについて述べると、大正11年ころから広島では県立高女や市立高女など、女子中等学校のバレーボールが盛んになり、昭和期に入り、全国大会で名をあげるようになった。男子では広島二中が大正14年に開始して翌年チームができたが、当時は二中

14) 金栴晴海「広島スポーツ100年」中国新聞社 昭和54年9月 P50-P51

15) 水谷豊「バレーボール——その紀元と発展——」平凡社 1995 P82-P84

と市立商業にしかなかったという。二中は神戸高商出身者の指導をうけて急速に強くなり、高師主催の西日本大会や神戸高商主催の全国大会で優勝を重ね、名を馳せた。また、職場のチームとして呉海軍工廠のなかに幾つかのチームが生まれ、これも全国大会で名をあげている¹⁶⁾。

このような広島の活躍は日本のバレーボール史のなかに大きな足跡を残しており、郷土の人々に関心と誇りを持たせたであろうし、安佐郡の運動の開始と展開にも環境的要因として心理的に影響を与えたであろうと思うが、ここで示されていることは、昭和初期に活発な活動が展開し始めたといっても、学校では少数の中等学校に限られており、小学校では昭和4年が最初の年なのである。

さらにいえば、わが国の学校では、その後においてもバレーボールが盛んであったのは主として中等学校以上であって、小学校の高等科では年齢的に今の中学に相当するので、体育の授業などである程度はしていたが、尋常科6年のなかではあまり行われなかったのである。その点で、郡部の学校には高等科をもつ学校が多かったにせよ、安佐郡の運動は尋常科を含め、かつ、地域の活動にまで発展していったところに、全国的にも稀な教育運動としての意義と独自性をみることができる。

Ⅲ. 安佐郡バレーボール運動のはじまりと、その着想

昭和4年に頼実氏がバレーボールを嚶鳴小学校で始めようとするころ、安佐郡の小学校ではドッジボールが盛んであり、郡大会も開かれて、頼実氏の率いる嚶鳴小学校チームが優勝していたことはすでに述べた。たとえ頼実氏が新しいスポーツであるバレーボールに興味を持ったとしても、なぜ安佐郡ではこれ程に勢いのあったドッジボールが、数年のうちにバレーボールに入れ替わったのであろうか。当時のある教師は、安佐郡でバレーボールが盛んになったのには、「天の時、地の利、人の和」¹⁷⁾があったからだ、と

16) (財) 広島県体育協会 「広島スポーツ史」 1984 P 386-P 387

17) ひろしまバレーボール調査研究会 「有馬静男氏インタビュー調査資料」 1996

いう。それは一体どういうことを指しているのでしょうか。

頼実力氏が最初にバレーボールを嚶鳴小学校で始めてみようと思った時、それは恐らく前節で述べたように、その年に県下小学校女子排球大会が開かれ、翌年は男子の大会が開かれると聞いて、それに参加してみようというのが動機であったであろうと思われる。広島のバレーボールは、まだ初期の段階ではあったが、昭和に入ると全国大会にも出場して相当の成績を示し始めており、さらに、そのための地区予選や地域での独自の大会なども行われるようになっていたので、それらのニュースは関心のある人々の目を惹きつけたに違いない。

頼実力氏も若い教師であり、スポーツの愛好者として関心を持っていたものと考えられる。しかし、はじめはバレーボールをよく知っていたわけではなかった。バレーボールは日本でそれ程普及してはいなかったし、また、当時のマスコミは主に新聞だけで、ラジオもまだあまり普及していなかった時代であったから、今日テレビで実際の様子がよく分かるのと異なって、ニュースによる理解はかなり間接的であり、細かい点は恐らく漠然としたものであったであろう。

戦後期に全国大会で優勝して注目された「嚶鳴クラブ」の監督を務めた沖道夫氏は、頼実氏について次のように語っている。「頼実氏はバレーボールをよく知らなかったので、どこかで試合があると必ず見に行って覚えたようです。あの人は他人に教えてもらうのがあまり好きでないので、自分で見て、自分で覚えたのだと思います。」また、頼実氏は「自分はルールが苦手だから、審判は引き受けない」といって、最後まで引き受けなかったということである¹⁸⁾。

従って、頼実氏はその後において、熱心で率先的な態度や指導力で安佐郡の運動の進展に大きな貢献を果たしたことは、多くの人はその功績を称えており、間違いのないことであるが、その当時に若く、また、さほどバレーボールに詳しくなかった彼が、俄かに大きな指導力を発揮したとは考えに

18) ひろしまバレーボール調査研究会「沖道夫氏インタビュー調査資料」1995

くいことである。安佐郡でも、また嚶鳴小学校でも、はじめはバレーボールはドッジボールと並行して、あるいはその片隅で行っていたことであろう。しかし、それが数年のうちに入れ替わるのは、古いものが新しいものに自然の流れとして入れ替わっていったのであろうか。それについては、多くの人がいろいろと語っている。

かつて古市小学校の校長を務めた葭谷（よしたに）實氏は「当時ドッジボールが盛んだったけれども、大勢の子供をこなすには校庭の面積の問題や、いろいろと難しいこともあって、バレーボールならコートがいくつもとれるし、9人制であれば、一日で何チームもこなせるから、それに頼実氏がバレーボールに関心が深かったので」と説明している¹⁹⁾。これは校庭のなかで大勢ができるし、大会に多くのチームが参加しても、十分にやっていけるということである。このことについては、後年に頼実氏自身が、「校庭に23面もコートを作り、200近くのチームを集め、一度に500人近く子供たちが試合に興じることができる球技が他にあるだろうか。」と述べている²⁰⁾。

この言葉は昭和46年頃のものであり、はじめからそれだけのコートを作っていたわけではないが、嚶鳴小学校では早くから多くのコートを作り、子供たちにはいつでもバレー遊びができるようにしていたし、また、70年近くにわたって大会をいつも引き受け、会場校となって一日中校庭一杯に展開する「バレーボール祭(大会)」の行事の世話をしてきたのである。これはどこの学校でもできるというわけにはいかないであろうが、嚶鳴小学校はそれを実績で示してきたのであった。

この度の調査で、多くの人がいうのは、「野球であれば、18人で校庭を使ってしまう。庭球だと1つのコートは一度に2～4人しか使えない。また、周りを広く空けておかないといけない。それに比べるとバレーボールは校庭一杯に一度に大勢ができる」ということであつた。限られた広さの校庭を

19) ひろしまバレーボール調査研究会「葭谷實氏インタビュー調査資料」1996

20) 同「頼実力氏 手記」昭和46年

いかに活用するかといった問題は、確かに大きな理由であろう。しかし、当時嚶鳴小学校で学んだ沖道夫氏は、「ドッジボールも大勢ができていたけれども、広島県に大きな大会がないから、県の大会があるバレーボールにしよう、ということになったと思う。」と語っている²¹⁾。これは大勢ができるということだけではなくて、県レベルの大会がある点があげられているが、これは、昭和4年に「県下女子排球大会」であり、翌年男子の大会があるという時に、頼実氏が生徒（児童）たちにそのように説明したのかも知れない。

また、広島二中の出身で祇園小学校の校長を務めた松井博氏は、「それには頼実氏が強引に推進したということもあったと思うが、まず場所的に狭い所でもできるし、用具もそれ程要らないから、学校もこれはいいぞということになった」という²²⁾。ここでは用具があまり要らないから、大勢の子供たちがいても、経費の点をあまり心配しなくてもよいというのである。しかし、ドッジボールもやはり大勢でできて、当時の学校にはあまり体育館がなかったにしても、学校での遊びや球技はほとんど屋外でしていたから、費用の点はバレーボールよりもかえって気にしなくてよかったのではないだろうか。

この点について頼実家を継いでいる正則氏は、次のように語っている。「当時はドッジボールが盛んでしたが、子供たちがすると親たちがやってきて、うまいとか下手だとか、審判に文句をつけるとか、親たちが喧嘩するとか、いろいろとうるさい事があるので、ひとつ、親たちの分からないのをしようということになって、広島でやっているバレーボールをやってみようということになった、ということを知ったことがあります²³⁾。」これは当時の地域の様子をよく表しており、教師たちがこのことについてかなり頭を悩ましていたのが、理由の一つであったのかも知れない。

21) ひろしまバレーボール調査研究会「沖道夫氏インタビュー調査資料」1995

22) 同「松井博氏インタビュー調査資料」1995

23) 同「頼実正則氏インタビュー調査資料」1995

すでに少し触れておいたように、バレーボールは後に地域の人々の間に広がっていくのであるが、当時ドッジボールも地域の人々に広がっていて、親たちは自分もしていると、よく分かるだけでなく、つい熱心になって、大会に子供と一緒にやってきて声援をするだけでなく、さらに踏込んで、いろいろと「やじ」や文句もでたのであろう。さらに最初に述べたように、麻を生産していたこの地域では、仕事が時間にせきたてられた競争のようになっていただけでなく、一日の仕事の結果がすぐに「せり」で値段の差になって表われるので、気の荒い風土があったようである。

親が分からないようなスポーツをしようというのと、少しうるさいことを避けるといった逃避的な理由に感じないでもないが、結果的にはかなり積極的な教育的効果をもつものであった。戦後から古市小学校に勤務した藤川勤氏は、当時のことについて次のように語っている。「以前から古市には麻の工場があって、地域の人や子供たちは野球をしたがっていた。しかし、校庭に野球場をとれば18人しかプレーできないが、バレーボールなら18人が遊べるコートが何面でも作れる。また、野球なら男子しかできないが、バレーボールなら女子もできる。また、ドッジボールは、ただ遊ぶだけだが、バレーボールなら技術的な練習が必要になるし、コートの中で選手同士の間隔が狭いから、チームワークやお互いの協力体制も必要で、子供たちにとってよいスポーツだということから、バレーボールに力を入れるようになった²⁴⁾。」

さきの頼実正則氏も、「バレーボールは皆が知らなかったわけだから、皆が一生懸命勉強して、子供たちにも一生懸命教えた。親たちもバレーボールが分からないから、教師は子供たちを思うように教育できた。」と続けている。ここでは親たちが、ただ静かになったというだけでなく、かなり教師たちの指導に敬意を払うようになった雰囲気も伝えている。

以上に、バレーボールを嚶鳴小学校で始めようとする時、バレーボールについてどのように考えたのかという問題について、ある程度明らかにし

24) ひろしまバレーボール調査研究会「藤川勤氏インタビュー」1995

てきた。これらの説明はかなり納得のできるものであるが、果たしてそれらの理由を踏まえた上でドッジボールをバレーボールに切り換えていったのかどうかという点、やや疑問がある。多分、このようなことについて多少の論議を交わすこともあったかも知れないが、始める前からバレーボールをよく知っていたわけではないので、むしろ、恐らく実践しながら次第にその効果を認め、さらに活動を継続していくなかで、その理由や根拠を次第により明確に確認していったのではないと思われる。

事実としては、昭和5年に学校と地域を揺るがす事件が起きて、放課後の指導に全校をあげて取り組むために何かをしなければならないという問題が生じたことが、そのきっかけとなったのである。昭和5年に嚶鳴小学校に新任教員として赴任し、後に小学校や中学校の校長を経て祇園町の教育長となった有馬静男氏は、その辺の事情に最も詳しい。その説明を聞いてみよう²⁵⁾。

「私は昭和5年に、ちょうどバレーボールが始まった年に赴任した。実はこうなんです。その年の2月にある万引き事件が起きた。捕まった子供たちは、みんなしていると言い出した。新聞に大きく報道された。古市では昔から麻の栽培があり、麻産業が盛んだった。母親たちは古川に出て働いて、家は留守になっている。子供たちは放課後集っては買い喰いをする。そのうちに物を盗むようになった。どうすればよいか、いかにしてこの汚名を挽回するかということで、古市の親たちを集めた。親たちが言うのに、学校は特別に何もしなくてもよいから、ともかく子供を夕方暗くなるまで学校においてやって欲しい。自分たちが川から戻るまで、子供たちを学校においてやって下さい、という話になった。」

「それではどうすればよいか。職員会議での結論は、勉強ばかりさせられないからドッジボールをさせよう、ということになった。ところが高等科から1年生までいて、強い球を受けて肺炎になる子がでてきた。これはいけないということになった時、頼実氏がバレーボールをさせようと言い出

25) ひろしまバレーボール調査研究会「有馬静男氏インタビュー調査資料」1996

した。無理なことをさせなくてもよいから、パスでもなんでもよいからやらせてみよう、ということになった。」

「頼実さんが本気でやるものだから、他の先生もやろうということになって、皆でやり出した。そうしたら子供たちは悪い事をしなくなった。それからは古市では悪い事がなくなったように思う。」

これは家が留守になるために子供の非行事件が起きて、放課後の指導を何とかしなければならぬという切実な問題が起きた時、ドッジボールではいけないということが分かって、それに代るものがどうしても必要になり、恐らくいろいろと意見や論議があったであろうが、頼実氏がバレーボールをやらせてみようと言い出しただけでなく、率先してやり出したので、他の先生もそれについてやり出して、全校的な取り組みが始まったというのである。そしてこれは、学校にとっても他にとっても、子供の現在や将来にかかわる、真剣な問題であったと思われる。

頼実氏がバレーボールをしてみようと言い出した時、果たして彼に自信があったのかどうかは分からないが、少なくとも直感的には、バレーボールはドッジボールで起きたような危険はなく、また、ある程度の技術を必要とするものであるだけに、ドッジボールのようにただ遊ぶだけでなく、あるいは、もう少し露骨に言えば、ドッジボールのようにただ相手に球を強くぶつけようとしたり、あるいは強い球を避けようとして、ただ逃げ廻るだけではなくて、むしろ、コートの中で協力し合ってゲームや練習をしたり、大勢の者が安全にできて成功や失敗を楽しみ、また、慣れてきたり、上達するにしたがって、それを喜び、さらにはもっと上達していきたいと思うような向上心を育てることができる種類のスポーツであることを、それとなく意識していたのではないであろうか。

恐らく頼実氏は、その後の実践が進展するにしたがって、そのような理解や自信をますます深めていき、時折の機会にそのことを人にも語り、次第にさきに見てきたバレーボールの長所に関する意見や説明が、多くの人々によって語られ、人々の共通意識にもなって、嚶鳴小学校を中心とした安

佐郡のバレーボール運動を今日まで継続させ、発展させる力になったのではなかろうか。

これまでバレーボールの持つ長所、ないしは特性について、いくつかの指摘をとりあげてきたが、実は、これらのバレーボールの創始者であるモーガン (W. G. Morgan) が、この球技を考案する時、苦心したものであった。彼はほぼ19世紀末の同時期に冬期のスポーツとして考案されたバスケットボールが、1つのコートの中で球を激しく取り合い、妨げ合うために、青年たちには適しているが、年長の成人には不向きなのを知って、新しい球技を作ろうと苦心を重ねたのであった。

そこで、まずネットを中央に張ってチームを左右に分け、味方同士は協力して球を落とさないで相手に返すことにしたのである。コートの広さやネットの高さは一応定めたが、人数やパスの回数は制限がなかった。参加する人は素手であるから、特別な準備も費用もいらぬし、自分の立っている附近を責任の範囲として動けばよいのだから、男女を問わず、年齢を問わず、大勢でできるし、また、楽しむためであれば、いつでも、どこでも、(短い時間でも、狭い場所でも)、だれでも、何人でも、また費用をかけずにできる球技として考案したのである²⁶⁾。

当時のアメリカは大衆のスポーツやレクリエーションが求められる時代に入りつつあったので、彼は、いわば今日の言葉の生涯スポーツの精神を実現しようとしたのであった。そのためにアメリカでは、これはレクリエーションや女子に適したスポーツとして理解され、競技スポーツとしては普及がかえって遅れることにもなったのであるが、安佐郡の運動はまさに創始者が苦心して作り出したバレーボールの長所に気がついて、それを子供たちのスポーツとして生かしたのであった。頼実氏もスポーツの愛好者として直感的に「これならやれる」と思ったのではなかろうか。

尚ここで、本節のはじめの方で述べた「天の時、地の利、人の和」という言葉について、改めて説明しておこう。「天の時」というのは、ドッジボー

26) 水谷豊 「バレーボール——その紀元と発展——」 平凡社 1995

ルに代わる何かが必要になって困った時、広島でバレーボールをしており、頼実氏がそれに関心をもって始めようとしていたことが、まさに「時」を得たことであり、その後の輝かしい発展によって「嚶鳴クラブ」まで生まれ、地域の栄光を勝ち取ったことである。また、昭和5、6年には安佐郡の教員に対して「体育研修会」が開かれて、そこでバレーボールの講習会が行われたので、教員たちが各学校にもちかえって指導を始めたことも、運動を郡内に広めていく上に、時宜を得た推進力となったのであった。

「地の利」とは、先程古市地区が麻の生産で親も忙しく、気が荒い傾向があったことを述べたが、学校がこの取り組みを始めると、学校に協力し、地域の連帯を高めようとする機運が生まれ土地の風土もずっと良くなったという²⁷⁾。もともと親もドッジボールをした土地柄であり、後に親や地域のなかにバレーボール運動がひろがったのも、親たちの連帯が生み出したと言えよう。しかし、「地の利」とはそのことではなくて、この土地が麻の産業や畑作農業の地域であったことそのものを指しているのである。

それは何故かといえ、バレーボールをはじめると、それが人々に喜ばれ、また、次第に盛んになって成果をあげていくので、もしここが水田地域だったら、こうはできない、もしそうだったら子供たちは田の仕事を手伝わされて、バレーボールなどをしているわけにいかないから、といった言葉が語られるようになったのである。まさに「地の不利」が「地の利」に変わってきたのであった。

また、「人の和」とは、いうまでもなく、頼実氏の熱心で率先した取り組みを中心にして、全校をあげてすべての教師たちが一致協力して推進したこと、地域の人々の協力をさすのである。

なお、嚶鳴小学校でバレーボールの取り組みが始められる時に、このような事情があったということについては、その後の70年近くにもわたる運動の栄光ある発展によって、今ではほとんど人の知らない、あるいは人が語らない事実になっているように思われるが、社会の急激な変化によって、

27) ひろしまバレーボール調査研究会「有馬静男氏インタビュー調査資料」1996

子供たちが遊びを失ったり、子供の成長・発達に必要な生活体験を失ってきたことが指摘されて、子供の健全育成や、そのための学校、家庭、社会の連携や協力の必要性が強調され、さまざまな実りある実践が期待されている今日、嚶鳴小学校における頼実氏の率先した推進力を中心として、地域や家庭と連携協力した全校をあげた取り組みは、われわれに多くの教訓を示しているといえよう。

IV. 安佐郡バレーボール運動の進展

——少年、少女バレーボール大会の開始期から昭和20年まで——

昭和5年から嚶鳴小学校でバレーボールの全校的な取り組みが始まり、昭和5、6年に安佐郡で教員の「体育研修会」が開かれて、その中でバレーボールの講習が行われ、合宿して熱の入った教員たちは、各学校に帰って児童を教え始めたので、郡内にバレーボールの機運が高まってきた。郡内でドッジボール大会が行われていたことはすでに述べたが、昭和8年からはバレーボール大会が始められることになった。恐らく郡内の学校は嚶鳴小学校の取り組みから、バレーボールの方がより安全であり、教育的であることに共通の理解を持ち始めたのであろうと思われる。これは今日の「広島少年少女バレーボール祭」として、現在では春秋2回行われている大会の始まりであり、すでに春季大会は63回、秋季大会は52回を数え、今日のご市小学校（昭和29年に嚶鳴小学校より校名変更）を中心とする地域の伝統行事として継続しているものである。

その頃すでに嚶鳴小学校チームは県内でも最強チームの1つに数えられるようになっていた。同年11月に行われた「中国少年少女選手権大会」で、嚶鳴小学校は広島一中をストレートで、かつ、大差で破り、一躍勇名を馳せたのである²⁸⁾。小学校といっても高等科のチームであり、郡の大会も高等科から始めたのであるが、2年後の昭和10年からは早くも尋常科が加わっ

28) 広島県バレーボール協会広報委員会「広島バレーボール50年のあゆみ」昭和52年12月 P40

ている。嚶鳴小学校が強く、郡の大会では他校の1学年上のチームと対戦することにしていた。それは頼実氏の方針であつたらしく、「嚶鳴小学校ばかり優勝してはいけない。他校も優勝の経験をして多くの学校がその喜びを味わい、大会に多くのチームが参加してもらわなくてはならない。しかし、嚶鳴小学校は、やはり、すぐに負けてはいけない。いつもいい所まではいかなくてはならない」というのが、口癖だったようである^{29,30)}。

そればかりでなく、嚶鳴小学校はいつも会場校を引き受け、教職員、地域住民、児童が協力して大会の準備や運営の世話にあたった。嚶鳴小学校は頼実氏の率先的な行動や指導のもとで郡内で最も強いチームとなつただけでなく、安佐郡バレーボール大会の会場校として、この運動の中心的な学校であり、その推進力となつていたのである。

嚶鳴小学校が強いチームとなつたといつても、頼実氏が勝つための特別な技術の指導をしたわけではなかつた。頼実氏はむしろルールにも、相手に勝つための技術的な面にも詳しくはなかつた。頼実氏の指導の基本は、いつもバレー遊びをさせて球に馴れ、自由自在に扱えるようになって、自分で工夫したり、それらを楽しんで、上達は子供が自分が心がけるようにさせることであつた³¹⁾。とくに2, 3人のバレー遊びをよく奨励した。そうすると、そのなかで子供たちは球に馴れるだけでなく、いろいろな球の扱いや駆引きを覚えたという。昭和9年に嚶鳴小学校に入学し、後に日本一のサーバーであり、レシーバーといわれた西田一行氏は、学校時代のことを次のように語っている³²⁾。

「小学校3年か4年になるとボールを1つずつ与えられて、いつも家から持っていき、持って帰る毎日で、学校の勉強道具よりはバレーボールの方が身近にあつた。バレーボールは学校でするだけでなく、家では物干し竿

29) ひろしまバレーボール調査研究会 「田平一暁氏インタビュー調査資料」1996

30) 同「坂井武彦氏インタビュー調査資料」1995

31) 同「米田一典氏インタビュー調査資料」1996

32) 同「西田一行氏インタビュー調査資料」1995

をネットの代りにして2人でやっていた。古市流でいう「ワン・ツー・ショイ」で、今あれがバレーボールの原点になっていたと思う。いつもあれをしていると球の扱いが上手になる。猫田勝敏氏が背が低くても球の扱いが上手なのはそれです。

「学校ではいつも3～4面のコートにネットが張ってあり、昼休みにそこでしょうと思うと、弁当を急いで食べて競争でコートに出る。皆がしたいから、足で線を引いてコートを分けて、2～3人ずつの組です。どうしてもコートの取れない時は、鉄棒をネット代りにしてするのです。」

同様に古市出身で日本一のエースとなり、現在マツダ女子チームの総監督をしている砂田祥次氏も次のように語る。「低学年の時からいつもバレーボールをしていた。いつもネットが張ってあり、足で小さいコートを書いてミニバレーをしていた。ネット際のプレーや駆引きはそれで覚えた³³⁾。」

また、頼実氏の指導ぶりについては、昭和56年の中国新聞の特集に、次のように書かれている。「登校したらすぐボールをもって運動場に出た。できる時はすぐにバレーボールをしていた。ボールなどを自費で買い、幾つもあった。始めると徹底してやる厳しい人だったが、いろいろよく気がつくし優しい面もあった。全くバレーボールをやるために生れてきたような人だった³⁴⁾」

安佐郡のバレーボール大会は当時「安佐郡学童排球大会」と呼ばれていたのであるが、大会が始り出すと、子供たちはこぞってバレーボールに熱中し、親たちも学校に協力し、次第に地域に欠くことのできない、地域生活の軸となる行事として続けられ、自ずから地域の伝統を形成するようになっていった。この学童排球大会が、昭和20年までの間、どのような形でどのように運営され、どのように進展していたのかについて、その概略を考察してみよう。

第1回は、昭和8年8月に行われ、13校29チームが参加した。主催は三

33) ひろしまバレーボール調査研究会「砂田祥次氏インタビュー調査資料」1996

34) 中国新聞特集「安佐のバレーボール（2）」昭和56年2月24日 P7

川村体育後援会で、村長が会長になっており、この形式はしばらく継続していたようである。世話人として地元の後援会の人々の名があげられており、全般的な面倒をみていたものと思われるが、試合などの実質的なことは、教職員や児童たちが協力して当っていた。この年は高等科の男子、女子とも、緑井小学校が優勝している。第2回は翌年9月に13校25チームの参加で、高等科男子は中原小学校、女子は川内小学校が優勝した。

最初の2年間は高等科の大会として始まっているが、昭和10年の第3回からは尋常科も加わり、昭和15年の第8回大会からは、さらに尋常科の女子も加わり、この年から児童のラッパ鼓隊の吹奏で入場行進が行われ、光彩を放った。参加校、チーム数は年々増加してきて、第7回は20校、50チーム、翌年は19校、54チームを数えたが、第9回は16校、46チーム、昭和17年の第10回は13校、35チーム、翌年第11回には13校、34チームと、顕著に減少している。

それは、昭和16年頃から次第に戦時体制が厳しくなり、皮革等の統制によってボールが入手しにくくなり、その他の物資も乏しくなって食料も統制され、全てに耐乏生活を強いられるようになり、練習もできなくなってきたからである。昭和18年にはボールが全くなくなったが、後援会の人が大阪まで出かけてボールを購入し、辛うじて大会を継続したという。

昭和19、20年には状況は一層悪化し、この2年間は大会を中止せざるを得なかったが、折角11回まで続けてきたこの大会が、このようにしてその姿を消してしまうのかと思われた。しかし、昭和20年8月に終戦を迎えたことにより、敗戦後の物資の極めて乏しい困窮の時代ではあったが、待ち兼ねたように昭和21年7月には「安佐郡少年少女バレーボール大会」と名称を変えて、早速に大会を再開しているのである。これは昭和18年の第11回に続く第12回で、この時だけは高等科男子の部と尋常科女子の部で、嚶鳴小学校が優勝している。苦しい時期にすぐに再開できたのは、人々が暗い時代のなかに明るい将来を求めて、新しい社会を再建していこうとする意欲を燃やし、何よりも元気な子供たちを育てていこうとしたからである

佐々木・岸本・宇野・荒井：広島市安佐地区におけるバレーボール運動の発展とその教育的影響に関する総合的研究 (1)

う。昭和22年には、頼実氏は嚶鳴小学校の校長となり、安佐郡のバレーボール運動は新しい進展の時代を迎えるのである。

ここに、昭和8年の第1回大会から同18年第11回大会までの記録を記載しておく。

「安佐郡学童排球大会」第1回より第8回までの概略

回	年度	開催日	参加校・チーム数	優勝校	備考
1	昭和8	8月11日	13校 29チーム	高等科男子 緑井小学校 高等科女子 緑井小学校	主催 三川村体育後援会 会長 徳永伊三太郎村長 世話人 山口徳太郎, 植木朝人
2	9	9月15日	13校 25チーム	高等科男子 中原小学校 高等科女子 川内小学校	世話人に 万光盛男, 沖西小太郎追加
3	10	7月23日	15校 34チーム	高等科男子 中原小学校 高等科女子 安小学校 尋常科男子 安小学校	本年度より尋常科男子が加わる 世話人に 山木有一, 谷本徳蔵追加
4	11	7月24日	12校 38チーム	高等科男子 中原小学校 高等科女子 川内小学校 尋常科男子 祇園小学校	世話人に 数田秀男追加
5	12	7月11日	14校 39チーム	高等科男子 伴小学校 高等科女子 伴小学校 尋常科男子 原小学校	
6	13	7月10日	19校 48チーム	高等科男子 川内小学校 高等科女子 伴小学校 尋常科男子 川内小学校	会長 山木有一
7	14	7月13日	20校 50チーム	高等科男子 祇園小学校 高等科女子 伴小学校 尋常科男子 川内小学校	
8	15	7月21日	19校 54チーム	高等科男子 安小学校 高等科女子 伴小学校 尋常科男子 山本小学校 尋常科女子 可部小学校	尋常科女子が加わる 児童によるラッパ鼓隊を編成
9	16	7月13日	16校 46チーム	高等科男子 祇園小学校 高等科女子 伴小学校 尋常科男子 川内小学校 尋常科女子 山本小学校	戦争が激しくなり, その影響で皮革統制となりボールの配給は隘路となって参加校が減少
10	17	7月19日	13校 35チーム	高等科男子 祇園小学校 高等科女子 伴小学校 尋常科男子 川内小学校 尋常科女子 安小学校	今大会より準優勝チームにも準優勝旗(4本)を授与する 高等科男子祇園小は3連勝, 高等科女子伴小は6連勝
11	18	7月1日	13校 34チーム	高等科男子 中原小学校 高等科女子 中原小学校 尋常科男子 山本小学校 尋常科女子 可部小学校	戦争は遂にボールの配給を中絶 後援会は大会用ボール購入のため大阪まで奔走した
	19			戦争のため中断	
	20			戦争のため中断	

戦後待ちかねたようにバレーボールを再開したのは、もちろん、安佐郡だけではなかった。広島や呉のチームは、昭和初期からこれまでの間に、地域でも全国大会でも活躍し、名を馳せていた。中学校（男子）では広島二中がしばしば優勝を重ねて全国に知れわたるようになり、女子では広島県女、広島市女、呉土肥高女などが、また社会人では呉工廠や広島専売のチームなどが、全日本や西日本や神宮大会などの各種の大会に出場して優勝しており、「バレーボール王国広島」と呼ばれる程になっていた。このような盛況は、ニュースとして郷土の人々の心を湧かせ、恐らく安佐郡の運動にも間接的にかなりの激励となっていたかも知れない。戦争末期に中断を余儀なくされた広島のバレーボールは、昭和21年には一斉に再開して立ち上がるのである。新しいチームも数多く生まれ、同年4月に呉市で開かれた県大会に出場している。そのなかに「古市希望青年会」というチームがあった。これが後に「嚶鳴クラブ」として全国制覇を遂げて一躍その名を馳せた、嚶鳴小学校の卒業生がつくった古市青年のチームである。

彼らも戦争で親を失ったり、敗戦後の困窮した生活のなかで、ゆとりのある者は一人もいなかった。彼らは何を心にもって生きていこうか、ということを集っては話合った。その時、自分たちには「そうだ、バレーボールがある」ということに気がついた。働いている場所も時間も違うので、集めるのは夜しかなかった³⁵⁾。4月の呉の大会ではまだ弱かったが、6月に嚶鳴小学校（当時、国民学校）で開かれた県選手権大会では、男女とも「古市青年」チームが優勝している^{36,37)}。そのあとで両チームとも「嚶鳴クラブ」と改称した。

女子の「嚶鳴クラブ」も県の大会で優勝したり、昭和22年には男子よりさきに全日本選手権大会に出場して準決勝まで進み、その名をあげている。

35) 中国新聞特集「安佐のバレーボール (3)」昭和56年2月25日 P7

36) 金柁晴海「広島スポーツ100年」中国新聞社 昭和54年9月

37) 広島県バレーボール協会広報委員会「ひろしまバレーボール50年のあゆみ」昭和51年12月 P71

しかし、選手の結婚などにより、同24年には解散したので、その活躍はほとんど知られていない。これに対して男子チームは、その後練習を重ねて益々腕を磨き、後援会ができ、町中が応援し、練習を手伝い、頼実校長が激励した。かくして昭和23、24年の2年にわたって、全日本選手権と国民体育大会に連続4回の優勝を果たしたのである³⁸⁻⁴⁰。

嚶鳴クラブが初めて優勝した時、高等小学校卒業の田舎の青年団のチームが、東京の大学のチームを破ったとして、全国を驚かした。全国から強いチームが試合をして欲しいといって広島を訪れるようになった。焦土になった広島にはコートがなかったので、ある会社が急いで板囲いのコートを作ってくれたという。

嚶鳴クラブの強さは独特なドライブ・サーブと、テンポの早いコンビ・バレーと、前衛からだけでなくどこからでも球を打ってくる意外さ（異色バレー）にあった。そして選手たちが異口同音に語るのは、その異色とも言える球回しの巧みさは、小学校の時にいつも2、3人でミニ・バレーでの遊びや練習が、その基礎になっていたというのである⁴¹。

昭和21年に再開した安佐郡少年少女バレーボール大会は、同年と翌年は従来通り高等科と尋常科で構成したが、春季のほかに秋季大会を加えた。昭和18年より町名は古市町に改称されており、学校が新制度に変わって、安と古市の両中学校が設置された。昭和23～26年の間は、大会は中学校の高学年と低学年の構成で小学校は除外されたが、昭和27年には小学校男子の部が、翌年には同女子の部が復活して、昭和29年に嚶鳴小学校から古市小学校に改称した時は、春季、秋季の両大会とも100チームを越える盛況を示す程になった。古市小学校には、校庭中にコートを作り、大会を運営した。し

38) 安古市役場「安古市町誌」昭和45年12月 P676

39) ひろしまバレーボール調査研究会「西田一行氏インタビュー調査資料」1995

40) 広島県バレーボール協会広報委員会「広島バレーボール50年のあゆみ」昭和52年12月 P80-P87

41) ひろしまバレーボール調査研究会「西田一行氏インタビュー調査資料」1995

かし、その後のさまざまな社会や学校の変化に対応して、その都度運営上の工夫を加えながら今日に至っているのであるが、その間の経過についても多くの教育問題が含まれているので、機会を改めて考察することにした
い。

本研究は1995年度より3年間にわたる広島修道大学総合研究所の共同研究の一環として実施した研究の一部である。

Summary

Research on the Volleyball Movement and its Educational Effects in Asa-minami District of Hiroshima City. (1)

—Analysis of educational and social factors that related
to the movement until 1950—

Hiroshi Sasaki (Professor of Hiroshima Shudo University)

Koujiro Kishimoto (Former Professor of Hiroshima Shudo University)

Tsuyoshi Uno (Former Professor of Hiroshima Shudo University)

Sadamitsu Arai (Professor of Hiroshima Municipal University)

This study aims at finding out the factors made possible the start and the long history of development of the volleyball movement at former Asa district at the suburbs of Hiroshima City, which is present Asa-Minami district of the city.

This movement was started in the early Showa period and has continued to this day, which is rather a rare and peculiar movement in Japan. To the students of history of volleyball game in Japan, it is rather well known fact that at one time many members of All Japan Team in Olympic games were from

佐々木・岸本・宇野・荒井：広島市安佐地区におけるバレーボール運動の発展とその教育的影響に関する総合的研究 (1)

Hiroshima, which can be said as one of the good results of this movement. Naturally, such result was not the aim of this movement.

Then what was the first aim of this movement? What was the motive when the leaders started this movement? We collected literatures and documents related to this movement and made research on these problems, and also interviewed many people who knew or had ever participated in this movement, and obtained many important findings.

The present article treats the phases of their early stages of this movement from the beginning to 1950, and analysed the educational and social factors related especially to the start and development of the movement.